

嵐山だより

—古典に学ぼう—

(公財)郷学研修所・
安岡正篤記念館評議員
高橋大輔

【第七回】ことばを、全身で書く

武器ことばを、楽器ことばへ

ことばには、人を励ます力がある一方で、傷つける力もあります。同じ思いから発せられたことばでも、受け取る相手や、その時の状況によって、響き方は大きく変わります。

元NHKエグゼクティブアナウンサー・村上信夫さんの著書である『嬉しいことばが自分を变える ことばの取扱説明書』には、「武器ことば」を「楽器ことば」に変えてみよう、という提案があります。「武器」は相手を傷つけることば、「楽器」は相手の心にやわらかく響かせることばを意味しています。本書を読み進めると、単なる言い換えの技術ではなく、人とうき向き合つかという姿勢そのものを問われているよう

に感じます。

たとえば、私たちがつい口にしてしまいがちな「でも」を、「それ、いいね」に変えてみる。「でも、それは……」と続けば、せっかく相手から差し出されたことばを、入り口で押し返してしまふ恐れがあります。でも、少し工夫して「それ、いいね」と変えてみると、まず受け止めることができます。

ここで私は、「いいよね」ではなく「いいね」であることにも惹かれました。「いいよね」と言えば、相手にも同じ評価を求める響きが生れます。対して「いいね」は、自分がそう感じたことを、そつと差し出すだけです。お仕着せがなく、相手に余白を残す。しかも「それ、いいね」ということばは、実際に声にしても心地よく、

紙にも書いてみたくなることばだと思います。

一方で、楽器ことばは、いつも明るく元気なことばでなければならぬわけでもありません。たとえば、本書には、「痛いのは生きてる証拠!」ということばを「痛いよね」に言い換える例もあります。前者にも励ましたいという善意があるのでしょう。けれど、痛みのただ中にいる人には、「我慢なさい」と聞こえてしまうかもしれません。それより先に、まず「痛いよね」と一旦受け止める。相手を変えようと思わず、その人が今いる場所に、ことばをそつと置くのです。

近ごろ相次ぐ国内外の気象災害などを前にすると、私たちの励ましのことばさえ却って空疎



『嬉しいことばが自分を変える
ことばの取扱説明書』
(村上信夫著、ごま書房新社刊)

に思えてしまうことがあります。被災した地域や人々に向き合い、一体何を言えばよいのか、ことばを選べない。そんな時、無理に前向きなことばを探すよりも、まず相手の声に耳を澄ますことの方が大切なのかもしれません。ことばが見つからない時には、あえて空白を埋めない。それもまた、ことばを大切にする態度の一つなのだと思います。

■古典は、実践してこそ

村上さんは、いわゆる古典の研究者や専門家というわけではありません。けれど私は、古典の「実践者」だと思っています。『論語』をはじめとする古典に親しみ、そこから受け取ったものを、日々のことばや、人との向き合い方にまで落とし込んでいくことが伝わってくるからです。



著者近影

古典は、読んで覚えるだけでは、もったいないと思います。昔の人のことばを知識として蓄えるだけでなく、そこに込められた人間へのまなざしを、今を生きる自分自身の行動へと移してみる。心に残った一節を、毎日の暮らしの中で一つ試してみる。ことばなら、いつもの一言を少し変えてみる。そして、ことばや書の形で、実際に伝えてみる。そうした小さな実践の積み重ねが、やがて自分を支える大きな力になるのではないでしょうか。

書道にも、同じようなことがいえると思います。名跡を眺め、字形や書法を学ぶことは大切です。しかし、最後は自分で筆を持たなければ始まりません。何度も書き、うまくいかなければ、また書く。その繰り返しの中で、頭で知っていたことが少しずつ身体感覚になっていきます。知識を実践へ移す。その過程こそが、学ぶことの醍醐味だいごみなのだと思います。

■ことばを、全身で書く

本書の第二部には、「ことばを全身で聴く」という章があります。耳で音を拾うだけではなく、自分の全感覚を使って相手の表情や間、こ

とばにならない思いまで受け止めようとする。そう考えると、書くという行為もまた、手先だけの作業ではないように思われます。

筆を持ち、姿勢を整える。呼吸を整える。筆に墨を含ませ、紙に向かう。そして、自分が選んだことばを、一画ずつ身体を通して紙の上へ送り出していく。書とは、自分の思いやことばを「全身で書く」営みでもあるのではないのでしょうか。

書には余白があります。墨で書かれたところだけが作品ではなく、書かれていない地の白もまた、一枚の書を構成する重要な要素でしょう。人との間のことばも、同じなのかもしれません。語ること、聴くこと、そして時には黙って寄り添うこと。それらすべてを含めて、ことばを大切にすることなのでしょう。

古典を学ぶことも、書を学ぶことも、知識として知ることが終わりではありません。実際に行動する。今日の一言を選び、書いてみる。その小さな実践の積み重ねが、いつか自分のことばを、自分の書をつくっていくのだと思います。皆さんなら今日、どんなことばを一枚の紙にしたためたいでしょうか。